

[研究論文]

ホルクハイマーとダーウィニズム

楠秀樹

神奈川工科大学 非常勤講師

Horkheimer und Darwinismus.

Hideki, KUSUNOKI

Abstract

Die vorliegende Abhandlung liegt die Intention zugrunde, am geschichtlichen Material der Soziologie und des Darwinismus die Kritik der instrumentale Vernunft von Max Horkheimer zu entfalten. Die Soziologie Spencers geht vom sozialen Darwinismus aus, daß sich menschliche Natur zu der Kämpfe um die Existenz eignen und solche natürlichen Eigenschaften einer Person in Wahrheit das Ergebnis der Zuchtwahl in der Gesellschaft sind. Horkheimer sagt, “als kulturelle Bewegung ist im neunzehnten Jahrhundert der Darwinismus von größter Bedeutung”. Gerade im Darwinismus zeigt sich eine Beziehung von Naturalismus und instrumentaler Vernunft Horkheimers. “Der Naturalismus tendiert – wie wir am Beispiel des Darwinismus gesehen haben – zu einer Glorifizierung jener blinden Macht über die Natur, die ihr Modell im blinden Spiel der Naturkräfte selbst haben soll”. Er führt auch eine Verachtung für die vernünftige Menschheit. Man rückt ab von ihrem eigenen Vernunft und tendiert bloß natürlichen Zuchtwahl zu dienen. Horkheimer betrachtet eine Dialektik zwischen Natur und Vernunft unter die Psychoanalyse.

Keywords: Horkheimer, Darwinismus, Natur, Vernunft, Psychoanalyse, Soziologie, Positivismus, Comte, Spencer

問題提起

本稿は、マックス・ホルクハイマーの思想の中でダーウィニズムがどのような意味をもっていたかを考える。ダーウィニズムは、20世紀初頭の哲学、あるいはこの当時制度化され始めた社会学にとって重要な思想であった。社会学は実証主義、あるいは科学の権威の増大と同時に、社会生活を科学的に組織化する要請の高まりも意味していた。したがって、ダーウィニズムと社会学は切り離せない。しかし現代社会において議論する本稿がなぜダーウィニズムなのか。ダーウィニズムが社会哲学に適用される時、現代社会同様、経済自由主義、個人の自己責任、科学的決定論、能力主義などが、社会における「淘汰」と「適応」の課題として語られるからである。

またこの議論は、ホルクハイマーが1930年代から、第二次世界大戦後に帰還したドイツにおいて、実証主義が果たした科学の位置づけとも無縁ではない。ホルクハイマーはアドルノやハーバーマスとともに、実証主義をめぐる論争まで展開することとなった(楠 2008,2012,2013)。社会学の古典としてのコントの実証主義は、1930年代の論理実証主義には大きな影響を与えている。コント社会学には、ダーウィニズムと異なる「進化論」が含まれており、それと比べ、スペンサーはダーウィニズムを社会学に適用して

いる。

1954年5月7日、ホルクハイマーは大学の講義において、「19世紀において、ダーウィニズムはとても重要な文化的変動であった」と述べている(Horkheimer 1954: 350)。筆者が知るところによれば、チャールズ・ダーウィンの『種の起源』(1859)以前に、すでに18世紀には多くの進化概念が引き出されていた。まさにそれゆえに、ダーウィンは自らの進化論を完成させたと言いうる。ダーウィンの主張の誤解と言えるものの、サルが自然界の階層秩序における人間とは全く別の生き物として、非歴史的に独立した「下位」の位置ではなく、歴史的連続である「進化」において人間の「内部」の原初に位置付けられるという人間観と自然観は広く浸透していくようになる(Bowler 1984=1987: 149)。

進化の観念そのものは、生物学を離れても、人間社会の直線の時間を表していた。特に19世紀の革命の時代には大きな意味をもった。ピーター・J.ボウラーによると、イギリスのレッセ・フェール経済の唱導者たちは、産業発展に社会の進化を見ていた。そのような人間社会の進化観こそが、有機体の進化論に先行していたのではないかとボウラーは述べている。しかし進化論は、「哲学の概念について」の中でホルクハイマーが述べるように、産業資本主義

の進化という社会観を正当化する自然観を構成する。人々は、自然主義、すなわち「われわれがダーウィニズムの例において見てきたように、自然を支配している盲目的な力を賛美する傾向をもつ。その力は、自然の力そのものの盲目的役割に典型が示されているのである」(Horkheimer 1947=1967: 171 =1987: 202)。それは手に負えない「自然」の観点から、人類に対する侮蔑を含んでいるとホルクハイマーは述べている。そしてそこでの人類は、自らも自然の一部でありながら、自然を裏切る者、哀れむべき者なのである。また彼は、1960年に公刊された *Hessische Blätter für Volksbildung*. 10.Jg., Heft 1 のなかで、次のように述べている。「ニーチェの思想を誤読し、大衆社会という病理の治療を提案し、ダーウィニズム的に把握される自然へと回帰しようという自然主義的人間論は、前世紀から一般に浸透している」(Horkheimer 1960: 141)。

そこで本稿の構成は、まずホルクハイマーの議論におけるダーウィニズムの意味を描写する前に、そもそも社会学における進化論やダーウィニズムのインパクトを、本稿の視点で考察する。すなわちコントの思想や「進化」観、そして同様にスペンサーのそれである。その上で、ホルクハイマー自身のダーウィニズムについての見解を明らかにしたい。その際、市野川容孝の議論を主に参照している。彼自身はダーウィニズムを主眼とはしていないが、スペンサー思想のリバタリアニズムとの系譜性や、医療社会学との関連性をとりあげている。彼のコント、スペンサー読解が進化論とも絡み合ってくるのは、市野川自身の代表的研究主題でもある優生学の歴史を意識しているためであろう。したがって、今後さらにコントとスペンサーについて言及していきたいが、ここでは市野川の優れた研究を信頼しておくこととする。

1. コントの社会学における進化

社会学史において、オーギュスト・コントは社会学の祖だと言われる。彼の社会学には進化論の要素はあるが、その議論はダーウィンの影響を受けることはなかった。時代がかみ合わないのである。彼の『実証哲学講義』第4巻(1839)は、『種の起源』(1859)以前のものである。しかしこのあとスペンサー社会学における明確なダーウィニズムの影響を確認するためにも、まずコントの提唱した社会学と彼の進化論について確認しておきたい。

1-1. 「社会」の概念

そもそもコントは「社会」という語の起源をアリストテレス『政治学』における「ポリス的動物」に見ている。ちなみにポリスは国家であるが、他にも村落(コメー)、家(オイコス)という共同体のレベルをアリストテレスは考えており、それらの全体をコイノニアと捉えた。この全体レベルの方が現在われわれの社会学において考える「社会」に近いと言えるであろう。

コントによれば、古代の「社会」概念には「進歩」の観念がなく、むしろもっと過去の社会を理想とする。たとえ

ばコントはともかくとして、日本人にもなじみの深い中国史を見ても、儒学は伝説的古代を理想として現代の政治を考える。進歩というよりも、むしろ現代の悪を古代の社会像によって是正するのが目的なのである。

1-2. 社会自然学

このコントがモンテスキュー(1689-1755)による人間の自然法則(*loi naturelle*)や、コンドルセ(1743-1794)による道徳政治科学または社会数学(「投票の逆理」で有名)の影響を受け、それらは彼の師であるアンリ・ド・サン＝シモン(1760-1825)の影響であったことは有名である。コンドルセ『人間精神進歩史』(1793-94)によれば、「集群生活(狩猟生活) → 牧畜生活 → 農耕定住とアルファベットの発明 → ギリシア文明 → キリスト教と科学の衰退 → アラビア文明 → ルネッサンス → 新世界の発見と印刷技術の発明 → デカルトからフランス共和国まで → 未来」と時代は推移する。サン＝シモンも、産業社会への進歩、博愛主義という思想をもっており、コントは彼らの社会進化の思想を受け継いだ。コントは、社会のピュシス、すなわち *physics* を構想するのだとして、当初、*physique sociale* を構想した。社会物理学と訳されることもあるが、市野川容孝は、これが社会科学ではないかと述べている(市野川 2012: 16)。筆者もそれを支持する。

市野川によれば、コントは当時、ベルギーの統計学者アドルフ・ケトレー(1796-1874)による同様の語の使用に対して反感を抱いたということである。ケトレーは近代統計学の父とも言われ、ラプラスの確率論を社会的研究へと応用する「社会物理学」(ここではコントのそれと区別して従来コントに対して言われたようなこの言葉にする)を提唱した(市野川 2012: 27 以下)。それが『人間とその能力の発展について—社会物理学の試み』*Sur l'homme et le développement de ses facultés, ou Essai de physique sociale* (1835) (邦訳『人間に就いて』)である。ケトレーは社会において諸個人の「平均」を、統計学を使って割り出そうとした。いわゆる「平均人」を構想し、個性が平均から見て単なる偶然にすぎないと主張した。ケトレーは平均像を通して万人を結びつける構想をしたが、それは統計的な量的平均という結びつきである(市野川 2012: 28)。コントは、もっと質的な結びつきによって、社会が一つの有機体のように構成されていると考えた。だから彼の場合、社会自然学、あるいは社会生物学と言った方が正確なのではないかと市野川は述べている。

たとえばゲオルク・ジンメルの『社会学の根本問題』における個人主義の二つの視点の整理も彼らに対応する、と市野川が補足してくれている。18世紀的個人主義は計量可能な普遍的基層の上に個性があると捉えると述べており、これはケトレーの「平均人」の発想に近い。しかし19世紀的個人主義は、個性が絶対的な質的差異だとしており、だからこそ分業的に結びつく(市野川 2012: 37)。これはコントの社会観なのである。そもそもケトレーは

「平均人」を目標とまで考え、徹底した平等を指針していた。対するコントは、質的な差異があってこそその連帯や秩序だと考えた。

しかしコントは、単純に国家の全体的統制を求めるヒエラルヒーに偏ってしまった。国家でも個人でもない、中間団体(association)こそが社会の構成であるという同時代人のアレクシス・ド・シクヴィルのような結論には至らなかったと市野川はまとめている。フランス革命後、ル・シャブリエ法(1791年成立)によって、1884年の職業組合法ができるまで、中間団体は許されていなかった。共和国の秩序のために、利害が異なる中間団体を廃止するという上からの個の平等の強制でもあったのだ。これは後にナチスも真似をするようになるが、ナチスは個々ばらばらな個人が支配しやすいのを分かっていたのである(市野川 2012: 42以下)。

1-3. 三段階の法則

以上のことから考えて、コントは個人を本当に個人にするのは社会的連帯であると考えた。個人がフランス革命以降に獲得した自由だけでは、人々は競合するばかりであり、それには協力や秩序が欠けている。むしろ個人は、結びついて社会として成り立つ時に意味を持つというのである。彼は革命と反動の歴史についてこう述べている。「現代の政治的諸派には、『秩序(ordre)と進歩(progress)の調和』を作る力がない。1789年の革命も、1830年の革命[いわゆる7月革命、フランス革命後の王政復古から、再度生じた市民革命]も、『否定的』政治も、『退歩的』政治も、さらに『停滞的』政治も、いずれもそれに失敗した」[1844年の『実証精神論』(*Discours sur l'esprit positif*) 第2部の9のタイトルである](Comte 1844=1920=1970; 186)。「秩序と進歩の調和」をつくりだす鍵はどこにあるのか。これは自然科学のように法則があるのではないのかとコントは考えた。

コントは「三段階の法則」(loi des trios états)の存在を打ち出した。社会自然科学の求めるピュシスの法則である(市野川 2012: 15-17)。社会の進化は、万物について神の摂理から想像する神学的段階にはじまり、哲学的思弁によって説明をつけようとし、個人の内なる理性を頼りとする形而上学的段階に至るが、それらの段階は十分に移行せずに停滞もする。フランス革命前後に起きた進歩の停滞や秩序の不備はそれだとコントは考える。そこで彼が構想する第三の段階がある。実証主義的段階である。社会を含めたあらゆる事物を科学で説明するのである。ここでの科学は、観察に基づく経験による。「予見せんがために見る」(voir pour prévoir)とは、予測のための現実認識の徹底を意味している。この認識論的な進化の段階に対応し、コントは実質的な社会進化を、軍事的段階から法律的段階、そして産業的段階とみているのであるが、最後の段階は、サン＝シモンも求めた協力的発展段階なのである(清水 1970: 16以下)。また彼は学問も進化すると考えた。無機の対象から有機的对象へ、方法的には観察から実験、そして比較(リ

ンネ(1707-1778)による博物学的外面比較からキュヴィエ(1769-1832)による比較解剖学的内部構造の比較という発展)へと至ると考えた(市野川 2012: 47)。具体的には、数学から天文学、物理学、化学、生物学、そして最後に社会学がそれらの成果を累積して進化すると考えたのである(Comte 1844=1920=1970; 225以下; 清水 1970: 22以下)。

そこで構想された社会学には二つの基礎がある。「社会静学」と「社会動学」である。前者は社会の静的状態、すなわち秩序の理論であり、たとえば個人が生存本能を満たす生活や、共感や社会生活の本能を満たす家族生活、そして上記二つの生(活)を総合する社会生活の認識を目論んでいる。つまり「個」と「共同性」の本能の具体的展開を構想したのである。アリストテレスで言えば、ポリス概念よりもコイノニア概念に近かったのではないだろうか。そして社会動学が進歩の理論である。

1-4. 実証主義

またコントは社会学を実証主義という立場としても打ち出しているが、実証主義には三つの柱がある。第一に「経験主義」がそれである。

想像ではなく「経験的」に観察するという「現実性」(réel)、思弁のみに頼らずに議論する「確実性」(certitude)、伝統的権威に依拠せずに個人の理性に訴えかけるという「精密性」(précis)の概念をもとに、現象相互を関連付ける法則の推論や因果関係の理解をする立場である。

第二に「進歩主義」がある。人間生活を改善し、社会を再組織化する「功利性」(utile)、既存の観念の否定や破壊ばかりでなく知識と社会を新しく構成する「組織力」(organisé)、超越や絶対的立場に依拠せずに対立する契機を認める「相関性」(relatif)の立場である。これは宗教や神学の組織した社会を哲学が否定、攻撃し、社会を破壊した後に、科学はさらにその哲学も否定、攻撃し、しかも哲学の否定的手法と異なり、どのように社会を再組織化すべきかという課題でもあった(Comte 1844=1920=1970; 177以下)。

そして第三に、コントは自らの立場を、晩年、「愛他主義」とした(Comte 1844=1920=1970; 205以下)。これが彼の実証主義思想の最期のメッセージとなる。産業革命と資本主義による、不平等、不自由を懸念し、利己主義に反感を持つ。抽象的で思弁的で実体がないのは「個人」であり、むしろ具体的に経験的で実質的なのは「社会」であるとコントは考える。人は誰かと結びつき、誰かから認められてこそ「個人」なのである。つまり、社会が個人を個人にする。いわゆる「公共の福祉」ばかりが個人の幸福を保障するとは限らない。社会に生きて人と結びついているという意識、他者への寛大な精神に鍵がある。人間の幸福は共感の本能や好意に由来する。社会は対立や憎悪を抑制し、共感や好意を拡大する。宗教ではなく、「社会」という実証的精神の道德が必要だとして、一種の人類教というべき宗教を形作っていった。その宗教的影響を受けたブラジル

の国旗には「秩序と進歩」(ordem e progresso)と書いてある。ブラジルの共和国制創始者たちに実証主義者たちが多数いたことに由来する。

1-5. コント社会学への批判

アドルノは『社会学講義』(Adorno 1968=2001)において、思弁的哲学を批判するというコント自身が社会についての実証研究、すなわち経験的な法則を見出すよりも、思弁的に社会進化を語ろうとしていたのではないかと批判した。またアドルノは、秩序と進歩の法則というが、結局は秩序に重心がかかっていることも問題視した。さらにはサン＝シモン、コント、そしてマルクス(1818-1883)も含めて科学技術信仰の傾向があったと指摘する(Adorno 1968=2001: 30-31)。この批判は、技術が社会を良くすると言う前に、その技術の方向性こそが社会によって決定されてきたことを考えてみるべきだということである。

アドルノと思想を共有したホルクハイマーも、1943年の『道具的理性批判』所収「拮抗する万能薬」の中で、実証主義者は科学技術が中立なものであり、そのためにも人は優れた精神によってそれを正しく利用することが必要だと捉えているようだが、はたして科学技術をそのように単純に捉えてよいものなのかどうかと問う。「社会の現実的進歩の中で、科学がいかなる役割を演ずるかを、アプリアオリに決めることはできない」(Horkheimer 1947=1967: 75=1991 75)。

1-6. コント社会学の意義

ユルゲン・ハーバーマスは、コント社会学に「進化」と関わる面白い意義を見出だしている。科学の実践的応用、つまり科学技術の時代が到来しつつあった中で、人々がその科学技術に期待しつつも、自分たちの生活と乖離する側面に困惑していた状況がコントの思想の背景にあったのではないかというのである(Habermas 1968=1981: 78 以下)。

科学の時代になるという実感を当時の人々はすでに持っていたが、それが「どこから来て、どこへ行くのか」という漠然とした不安に答える効果が、コントによる稚拙で単純とも思える進化の法則論にはあったとハーバーマスは捉えている。フランス革命後の社会の混乱という背景だけではなく、コントは進化の最終段階に産業社会の到来を見据え、科学技術の時代の到来を批判するのではなく、それを迎え入れる社会の形をイメージし、また公的にそれを人々にイメージさせる提案をしたのだった。もちろん彼の大学講義を通してなので限定的ではあるが、学生を介してこの考え方は流布されることになった。彼の社会学に実証性(否定ばかりではない *positivité* という意味で)、あるいは実践性があるとすれば、彼が科学と社会学の時代を「プロパガンダ」したことそのものにある。ハーバーマスは、従来の神学や哲学による知識の支配を科学が独占していく過程で、社会についても科学するというコントのプロパガンダ(=宣教)があったと述べている。

また、「人間が外界に及ぼす影響力」が問題だともコントは述べている。彼の学問的進化の理論からすれば、物理学や化学の段階に至り、テクノロジーが自然界や人間界に影響を及ぼすようになった。生理学や医学の面でも発展が大きい。19世紀はそうでもないが、現代社会ならば生物学からテクノロジーが生じる。人間社会のあり方についても科学が実行力を及ぼす可能性をコントは模索していたのである。

2. スペンサーとダーウィニズム

コントは国家の役割を重視していた。中間結社を禁じるのではなく、それを認めることで国家は豊かなものとなる(市野川 2012: 98)。しかしスペンサーは、国家による個人生活への介入を徹底的に否定した。スペンサーは『社会静学』(1850)を出版するが、この時すでにコントが「社会静学と社会動学」と言っていたことを知らなかった(同上)。そこで1865年の『社会静学』アメリカ版序文において、コントをナショナリストとして位置づけ、自らの立場と対比している。したがって、スペンサーは、個人の自由な経済生活の放任を社会の第一原理とした。「すべての人間には、他のどの人間にも平等に与えられる自由を侵害しない限り、自分の望むことすべてを行う自由がある」とスペンサーは『社会静学』の「第一原理」で述べている(市野川 2012: 99)。

2-1. 社会主義への憎悪

ケトラーが自由主義とも評価されつつも平等主義であったのに対して、スペンサーは平等主義を社会主義として否定的に評価した。その背景についても、市野川が解明している(市野川 2012: 102 以下)。イギリスの救貧法(1601)は、労働可能な者に労働を、不可能な者に扶助を、その財源を地方税にする、という三本柱を打ち立て、1795年にスピーナムランド制ができた。いわゆる最低賃金保障制度である。それは「パンの時価×家族人数=その家にとっての最低賃金」ということで、戸別に賃金補助が出る。雇用主はこの賃金補助を当てにして賃金を引き下げたため、制度に批判が生じた。そのためか、新救貧法(1834)では適用条件が厳しくなったにもかかわらず、厳しすぎるために実際の運用は緩和されていたので状況は変わらなかった。こうした文脈において、スペンサーは、個人が経済生活において甘やかされてはいけぬ、厳しさのなかで人は学ぶと考えるようになった。「善意に満ちてはいるが、思慮のない博愛主義者たちは、事物の自然な摂理によって社会は常に、不健康な人間、低能な人間、愚鈍な人間、何一つ自分で決められない人間、不誠実な人間をその外に締め出すという事実をわきまえない結果、浄化のプロセスを妨げるばかりでなく、ますます劣化をもたらすような介入を奨励する」とスペンサーは『社会静学』において述べている(市野川 2012: 104)。

2-2. 適者生存

ここにおいて、ダーウィンの自然選択のイメージがスペンサーの思想に強烈に根付く。市場経済での弱者の淘汰は、彼にとって自然な出来事なのである。そしてスペンサー自ら積極的に、「適者生存」(survival of the fittest)と述べるようになる。いわゆる社会ダーウィニズムの思想である(同上)。多様で異質な分化こそが進化であり、人間はその頂点として、人種、民族、文化の多様性を誇り、そして個の異質、多様も誇るとスペンサーは考える。ただし、この異質性については、次のような例も挙げている。スペンサー言うところの「未開人(パプア人)」は、四肢の形質が同質で、西洋人は足が手より長く異質であり、異質の方が進化し優れているというのである。頭蓋骨も顔の横幅と後頭部にかけての長さが未開人では同質だが西欧人では後頭部が長く、脳容量も大きく、異質さによって優秀だと言うのである。さらに、西洋人でも子どもの時は丸くてぼつちやりして鼻も扁平であるが、大人になると異質に分化するのに対して、未開人は似た顔のままだと述べている。いわゆる骨相学の影響である(Spencer 1911=1970: 405-406)。

ところでスペンサーは、「社会進化」について全体的なイメージも表している。すなわち軍事型社会から産業型社会への進化である。そのため、軍事費や植民地への派兵、維持は個人の自由を制限する無駄な支出だと捉えていた。進化論に基づき、自然が人間に進化を保証すると考え、結局はコントのような社会の有機的構成も考えていた。ただしスペンサーは、自然淘汰が社会という生物を健康にし、適者生存した者のみが相互依存を許されると考えていたのである。貧者や社会的不適応者は、スペンサーにおいては、社会の病気だったのである(市野川 2012: 107 以下)。

それこそスペンサーは、英国の公衆衛生法(1848)にも冷ややかだった。虚弱体質は淘汰されるべきだと考えたのである。「自然はそういう人間を世界から一掃して、より優れた人間に場所を与えるのだ」と『社会静学』においてスペンサーは述べている(市野川 2012: 105 以下)。虚弱体質の保護は、社会全体の人間の質を劣化させると考えたスペンサーは、社会学の祖の一人であると同時に、間違いなく優生学の祖の一人と言えるのである。そして現代日本のような新自由主義社会から見て、あらためて基礎的なイデオログと見ることもできよう。

3. ホルクハイマーとダーウィニズム

ホルクハイマーによる 1947 年の『理性の腐食』(*Eclipse of Reason*)に収められている「自然の反乱」において、およそダーウィニズムについての言及はこの論文に集中している。以下でホルクハイマーのダーウィニズムについての言及を検討する。

3-1. 自然淘汰と適応

ホルクハイマーは述べる。「人類は、自己を解放する過程で、自己の世界に属する自己以外の部分と運命を共にする」(Horkheimer 1947=1967: 106=1987: 114)。人類が自然を支配することで自己を解放するということは、実は自

己の内の自然の支配にも通じているとホルクハイマーは述べている。たとえば、自然支配によって作り上げた人間の産業社会は、個人の産業社会における自己犠牲によって成り立つようになり、個人の内面を抑圧するが、その体制を覆すものではない。「そうした自己犠牲は、手段に関する合理性をもたらさずして、人間存在にかんしては非合理性をもたらすのである」(Horkheimer 1947=1967: 106=1987: 115)。しかもこのような「合理化された非合理性としての文明は、自然の反乱をもう一つの手段あるいは道具として統合する」(Ebenda)。つまりここで言う自然とは、内面の自然、心理であるが、それはまさしく理性に支配されるべきだとして、外的自然の支配と同じ原理で語られるようになる。それこそがダーウィニズムの論理なのだとホルクハイマーは述べる。

「支配と反乱の間の相互連関の徴候となる精神的諸傾向のなかで、ダーウィニズムはその一例として論じられるであろう。それは、人間の自然支配と自然への従属が同一であることについての、より典型的な哲学的説明が欠けているためではなく、ダーウィニズムが、免れえない論理によって今日の文明的状況への道を指摘した、大衆啓蒙運動の画期的事件の一つであるからである」(Horkheimer 1947=1967: 107=1987: 116)。

スペンサー社会学が果たしたように、ダーウィニズムの自然淘汰は、あたかも合理的行動であるかのように捉えられるようになる。「文明の要素の一つは、自然淘汰を合理的行動によってしだいに置き換える過程として描写されるであろう。生存、われわれに言わせれば性向は、個人に圧迫を加える社会の圧力に個人が適応しうる能力にかかっている」(Horkheimer 1947=1967: 107=1982: 116)。個人は社会に適応しなければならぬとダーウィニズムの自然の論理が一般化する。社会というとおおざっぱであり、個別具体的には、一定の組織への適応として要請される。そして個人は組織を自らの自然として引き受ける。すなわち進化論の主体像への影響は、そもそも現実と対決する個人の主体性を、個人が組織やその決定や社会に「適応する」主体性へと変質させたところにある。

そして適応能力があるということによって、たとえば人は職を変えるようになる。しかしそれは人が柔軟に生きて時間の余裕ができて、思索ができるようになったことを意味してはいない。むしろ逆であり、社会の側が転職を要求し、時間や余裕や思索を奪うのである。これはわれわれがわれわれの内的自然を支配すること、いわゆる現代的意味での「自立」に則って、己の内面的自然を支配して克己するという考えに基づいている(Horkheimer 1947=1967: 108=1987: 117)。

「人間は、行為の絶対的規範や普遍的な拘束力をもつ理想に依存することがしだいに少なくなった。人間は完全に自由であると考えられているために、自己自身の他にはどんな規範も必要としない」(Horkheimer 1947=1967: 109=1987: 118)。しかしホルクハイマーは、このような独立性の増大と並行し、受動性も増大すると述べている。「手

段にかんする人間の計算が抜け目なくなるにつれ、目的の選択は、かつては客観的真理への信念と関係づけられていたのに、思慮のないものになってきた。個人は、客観的理性の神話を含むあらゆる神話の残滓から身を浄めるや、適応の一般化様式に従って自動的に反応するものとなる」(Ebenda)。

ホルクハイマーによれば、この結果は、「天地万物を自己保存の手段に変える」自我と、人間が伝統や神話によって付与した意味を喪失した単なる素材や資源としての「支配される以外なんの目的もない自然」のみである。こうしてダーウィニズムによって、理性とは適応を意味するようになった。

3-2. 進化の検証

ところで人々の選択権の拡大が自由を意味する時もある。ホルクハイマーは、現代の労働者が消費選択の面ではアンシャン・レージュム下の貴族よりもはるかに豊かであると例示する。なるほどそれは一つの歴史的発展である。しかしそれは手放しに自由の拡大と言えるものではなくて、消費生産システムの変質と、生活の変質、自由の意味の変質として理解せねばならないとホルクハイマーは警告する。この消費生産のシステムには新しい抑圧が付随してくるのである。かつての生産者と今日のプロレタリア、職人仕事と工場労働では後者の方が効率的である。しかしそれは、自己の判断が感覚と結びついた自由ではなく、むしろ機械的な精密さに自己を適応させる機会との一体化を人々に強いるようになった。生産労働は感情や思想ではなく、むしろそれらの克服となってしまったのである(Horkheimer 1947=1967: 109f=1987: 118 以下)。

また消費にかんしても、巨大なコンツェルンやカルテルの形成によって、消費者は選択権を有するというものの、どれを選ぶのが実は同じという状況が生じてきているとホルクハイマーは述べる。「等しい値段をつけられた大衆的商品のあいだの質的な相違は、通常、二つの商標のタバコのニコチン量の差異と同じくらいわずかなものである」(Horkheimer 1947=1967: 111=1987: 120)。しかしその差異は、経済機構の力によってあたかも重大な「啓示」のように宣伝されるが、もちろん消費者も一方的にそれを真に受けるわけではないものの、消費生活に「適応」するのだとホルクハイマーは述べる。

ナチス政権下の民衆生活についても、ホルクハイマーは次のように述べている。「民衆の方は、間断ない膨大な量の宣伝に従ってきたために、新たな権力関係に受動的に自己を適合させ、また経済的社会的政治的組織に自己をはめ込むことができるような反応だけを許容する姿勢を作り上げていたのであった」(Horkheimer 1947=1967: 111f=1987: 121)。もちろん、適合や服従はナチスの時代、大量消費の時代以前にもあった。しかしホルクハイマーは、科学技術、消費、ナチスのような政治プロパガンダのもたらした問題の核心には「速度」があると述べる。適応や服従を問われる速度が速く、あまり考える暇もなく従う巨大

な機構の回路の一部に、個人が変質するのである。しかしそれは子どもが権威に従うような素朴さによるものではなく、大人としての一種の諦念に基づいている(Ebenda)。

3-3. 矛盾の制度化

ホルクハイマーによれば、理想主義が即物的な現実にとって偽善となることもあったが、現代は偽善に欺かれていない。しかしそれは理想と現実が矛盾しないからではなく、「この矛盾はただ制度化されているだけのことである」(Horkheimer 1947=1967: 112=1987: 122)。人生の悩みに対して、商品の説明のような文体が用いられる。それらは同じ書き手なのかもしれないとホルクハイマーは述べる。彼によれば、小説家は小説を映画化も見込んで書き、作曲家は商業利用を見込んで作曲する。つまり崇高なものや理想とされていたものが、いつでも商業転用可能なものになりうる(Ebenda)。

「かつては、事物と生の意味を表現すること、物言わぬすべてのものの声であること、自然にその苦痛を語る器官を授けること、できるかぎり実在をその正しい名によって呼ぶこと、こうしたことが芸術や文学や哲学の努力の内容であった。今日、自然の口舌は奪い去られている。かつては、一つ一つの発声、言葉、叫び、身振りは本質的な意味をもつと考えられていた。今日では、それは単なる出来事にすぎない」(Ebenda)。

言葉は変質し、「人が、一つの事物を讃えたり、一つの感情や態度を尊重したり、一人の人間に無償の愛を捧げることを求められた場合、人は感傷的なものを嗅ぎつけ、だれかが自分をからかっているのではないか、何かを自分に売りつけようと企んでいるのではないかと疑わずにはいられない」(Horkheimer 1947=1967: 113=1987: 123)。自然の意味付けは、何らかの広告、戦略、さもなければ科学的対象として分析されるものとなっていく。これは個人の実利から距離があるが、結局は諸個人の何らかの利用に向けられている。

3-4. 道具的理性

ホルクハイマーによれば、生産手段の発展は、世界を目的の世界ではなく手段の世界にする。「物質的生産と社会組織がより複雑になり物象化されるにつれ、手段を手段として認知することはますます困難になる」(Ebenda)。手段を手段として認知する観想には時間的余裕が必要である。ホルクハイマーは、それが特権的なものでもありうるとし、しかしそれは人間の美德としてイデオロギーとなっていくと指摘する。肉体労働からまぬがれているのが上位であるというイデオロギーである。とは言え観想や思弁は許されない社会体制が今や出来上がってしまったとホルクハイマーは考える。「特権的集団の混乱した言葉においてであれ、自然が人間の意識を通して語りかける機会には完全に剥奪され、自然は復讐を企てているように思われるのである」(Horkheimer 1947=1967: 115=1987: 125)。

宗教思想家たち、パウロやトマス・アキナス、ルター

たちも、人間の魂の救済と動物の苦しみを当然視していた。それは「人間は動物に対していかなる義務も負わない」という教えのためであるとホルクハイマーは述べる(Horkheimer 1947=1967: 116=1987: 126)。つまりそれらは人間にとって道具となってしまうべきという教えであり、人間理性は動物を道具化する正当な根拠だというのが、ホルクハイマーは、その理性は道具にのみ関心を持ち、それどころかその理性そのものが道具的であると述べる。つまり道具的理性である。

3-5. 自然の征服

自然の征服は、人間による人間の征服でもあるとホルクハイマーは述べる。そこで自我の概念の二重の意味について考えると彼は述べている。「一般的には自然に対し、特殊的には他人に対し、また自己自身の衝動に対し闘いをいどみ勝利を収めようとする自己の原理として、自我は、支配や命令や組織の機能に関係をもつと考えられている」(Horkheimer 1947=1967: 116=1987: 127)。ホルクハイマーは、自我を母権制で描かれるような原始社会や、奴隷制の中で生きる人間には見出されないようなものだと述べる。つまりそれは個人としての意志がはっきりしたものなのである。

従って、神や人に支配され、自然に支配されるものではなく、「自我は自然を支配する」(Horkheimer 1947=1967: 118=1987: 129)。たとえばフィヒテの哲学を見れば、「自我はそれ自身の無限の活動のほかには実体や意味をもたないにもかかわらず、全宇宙は自我の道具となる」(Horkheimer 1947=1967: 119=1987: 130)。ホルクハイマーによれば、自然は限界をもたない略奪対象とされ、理性による目的をもたなくなった。これは無際限な帝国主義である。動物と違い、人間の欲望は、「人間自身の本性から直接的に生ずるものではなく、社会構造から生ずるのである」(Ebenda)。人間は本性に従っていると論じられるが、そのような現象は実は社会的諸関係、対立や連合によって成り立っている。

3-6. 文明の抑圧

このような人間の自我の構成について、ホルクハイマーはフロイト精神分析に依拠する。人は生まれて成長する間に文明の抑圧、あるいは理性の抑圧を受けるが、それは超自然的な抵抗しがたい力、命令であるというのである。親のしつけは子どもにとって苦痛を伴う。自己の衝動を抑圧し、そのことで自己を自己として意識するようになる。父親は具体的な人間であると同時に、自我を絶えず監視する規範や命令としての抽象的な「超自我」ともなるのである。ホルクハイマーは、親の愛にこたえようとし、超自我に従う子どもは、いつしか衝動抑圧の不快さを憎悪に変えて超自我に向けるようになる。それはすなわち文明そのものへの憎悪となるというのである(Horkheimer 1947=1967: 120=1987: 132)。

超自我の命令は、父親のみならず、学校制度の整備によ

って集団的なものになっていく。あるいは友人関係の中での禁圧も生じてくる。ホルクハイマーは、それは父親からの規範の強制よりも厳しいものだとして述べる(Horkheimer 1947=1967: 120f=1987: 132 以下)。子ども同士においては議論もなく暴力で訴えかけてくる点にその厳しさがあるとホルクハイマーは指摘しているが、現代日本であれば、学校や友人関係の中の空気、いじめ(あるいはその対象にならないようにまさしく「自己」を放棄する)が最も強力な自我の抑圧として浮かび上がると言うこともできるであろう。

加えてホルクハイマーは、家庭における母親の役割は、育児や教育の科学的合理的解明によって、かつて愛情と捉えられていたやさしさや励ましをよそよそしい技巧に変えてしまったと捉える。すなわち、母子の関係も教育的成果を求める母の道具的理性にからめ取られていくのである。そもそも性は結婚によって公式な承認を得るが、その他方で売春の存在を認めている。とはいえ結婚そのものが女性の側にとって社会的承認や社会への適合と捉えられるようになり、いわば結婚は市場のように個人が競合する、自然淘汰の現象と化してしまったとホルクハイマーは捉えている(Horkheimer 1947=1967: 121f=1987: 133 以下)。E.フロムも、『愛について』において、同様に「愛される技術」について述べている(Fromm 1956=1991)。もちろんそのような技術内容の問題ではなく、技術技巧で愛されることを求める個人の恋愛のあり方、結婚の意味を考えてのことである。露骨にも現代日本では「婚活」という表現によって、政府の補助する市場が出来上がっており、マスコミは「愛される技術」の内容と成果を報道するのに余念がない。しかしそれは生殖による国家の生存の問題だと捉えられてもいるのである。

恋愛と性と生殖とは、三位一体で家庭の機能として公認されるや否や、国家の介入対象ともなる。まさしく進化論を背景として、優生学も発達したのである。国家は量の面でも、質の面でも国民を管理する。

3-7. 自然の反乱—ナチズム

家庭や教育の話が出たが、個人は「模倣」という原初的な行動から物事を学ぶ。ホルクハイマーはこれが一つの文明が他の文明をまねることとしても言えるとしている。ここではつまり進化とは合理性の進化、技術の進化だと述べている。「模倣」は原始世界のものであり、人間の根本的衝動だとホルクハイマーは捉えているが、そのような模倣に基づいて「魔術を行うより土壌をうまく開墾すること」、「公式が偶像にとってかわり、計算機が儀礼的踊りにかわる」(Horkheimer 1947=1967: 124f=1987: 138)。そのような合理的進化は、人間の根本にある「模倣」を抑圧してしまったが、これに対して、「ドイツにおける国家社会主義者の集会に参加したことのある者はだれでも、演説者も聴衆も社会的に抑圧された模倣衝動を表現するときにもっとも快感を感じることを知っている」(Horkheimer 1947=1967: 126=1987: 140)。ナチスは文明的抑圧からの

自然の解放者であるかのようにふるまい、聴衆の「無意識」に訴えかけたのだとホルクハイマーは述べる。しかしナチスは個人として自律できず、不安な人々の心理を自然回帰、あるいは「自然の反乱」であるとしてひきつけつつ、法を解体し、制度を解体し、しかし結局そこに独自の組織や法をつくりだす。科学テクノロジーについても、自然に回帰するはずのナチスが軍事力を維持する。ホルクハイマーは述べる。ナチスは「自然を解放するどころか、それに枷をはめ」(Horkheimer 1947=1967: 131=1987: 146)、「自己が排撃すると公言した機械文明の卑屈な追従者として、ナチ体制は文明の本来的抑圧手段を継承した」(Horkheimer 1947=1967: 131=1987: 147)。ホルクハイマーは、ファシズムが「理性と自然の悪魔的総合」だと述べている(Horkheimer 1947=1967: 131=1987: 146)。対して彼は、哲学はこの二つの宥和を夢見てきたのであると述べている。

3-8. ホルクハイマーとダーウィニズム

ホルクハイマーは、ナチスから逃れてアメリカ合衆国で「自然の反乱」を書いているのだが、この地はヨーロッパと異なって、そもそもナチスのような自然の支配と自然の反乱とが結合している。それこそがダーウィニズムの影響によるものと言うのである。ダーウィニズムは淘汰と適応という人間の自然支配であると同時に、それこそが人間の自然として人間自身に跳ね返ってくるのである。しかもこのダーウィニズムはスペンサー経由でアメリカに浸透したとホルクハイマーは述べている。「ダーウィニズムがアメリカ人の思惟に与えてきた影響は、神学的遺産を除けば、おそらく他のどんな精神的力にも勝っている。ダーウィニズムから直接きたか、なんらかの哲学的媒介者、殊にスペンサーを通して由来したかである」(Horkheimer 1947=1967: 132=1987: 147)。

しかしホルクハイマーは、ダーウィニズムは、それこそ自然と理性の宥和という哲学の理想ではないのかと問う。人が生きていく上で居場所を見つけ、互いが支え合うようにすみ分けると言うことを意味してか、ホルクハイマーは「謙虚」、「謙遜」の哲学ではないのかと述べている(Horkheimer 1947=1967: 132=1987: 147 以下)。しかし「通俗的ダーウィニズム」は、行為と倫理の第一公準として、「適者生存」という謙遜とは逆のものとなって行くとホルクハイマーは捉えている(Horkheimer 1947=1967: 132=1987: 148)。

ホルクハイマーによれば、ダーウィンはアリストテレスからヘーゲルに至る進化についての形而上学的概念を攻撃し、単に出来事の連鎖と捉えた。生物としての目的の実在性や、その進化の定まった方向性などではないのだ。しかし結局、その偶然性のゆえに、ますます自然は人間にとって厳しい神となっていく。ホルクハイマーは、ダーウィニズムが理性を個人が自然の厳しさに生きる小さな手段にしてしまうと述べている。そしてダーウィニズムは自然の反乱に位置すると述べるのである。「理性は自己自身の

優位性を否認し、自然淘汰の単なる奉仕者にすぎないことを告白している」(Horkheimer 1947=1967: 133=1987: 151)。この自然概念は、他の自然概念も許さず、また自然淘汰を生きるための道具的理性概念以外の理性概念も許さない。したがってむしろ、ホルクハイマーは、「自然に助力する唯一の道は、一見自然と対立する自律的思惟を解放する」ことにあると述べている(Horkheimer 1947=1967: 134=1987: 152)。

結び

理性を自然淘汰の奴隷から解放し、自然とは何かを考え直すための理性的自律性が必要なのである。それこそが自らの中や、社会関係の中、そして人間社会の環境としての自然を、自然淘汰とは別の自然として考える契機である。自然環境現象や動物界でさえ自然淘汰では語りつくせない。もちろんその自然概念によって説明はできるとしても、自然概念にはすみ分けや共生の可能性がある。そのことによって、進化概念も、人間社会における進歩という理想を放棄する必要がなくなるのかもしれない。この進歩論について、ホルクハイマーはコントをどのように評価していたのかはまた別の稿に譲らねばならない。

ところで現代日本において、政治家や経済人が、「人間の本能は暴力性にある」として、「偽善で覆わずに本音を言う」などと言うとき、そこには自然淘汰や適者生存の観念が隠れている。同時に、そのような言動に対して、ナチスの例にもれず、抑圧された自然の解放のごとく好感を示す人々もいる。それは自然淘汰と適者生存の思想に貫かれた環境が、学校や職場でますます強められているからでもある。支配層ばかりでなく、被支配層が、自然淘汰と適者生存の観念の下で成長する、進化するのだと信じ込まされているのである。

参考文献

- [1] Adorno, Theodor Wiesengrund: *Einleitung in die Soziologie*, (1968), Hrsg. von Christoph GÖdde, Frankfurt am Main. =邦訳 『社会学講義』河原理・太寿堂真・高安啓介・細見和之訳 作品社(2001)..
- [2] Bowler, Peter, J.: *EVOLUTION, The History of an idea*, (1984), The University of California Press, =邦訳 『進化思想の歴史』(上)(下)鈴木善次他訳 朝日選書(1987).
- [3] Comte, Auguste, *Discours sur l'esprit positif*, (1844=1926), Paris. = 邦訳 『実証精神論』『世界の名著第36巻 コント スペンサー』清水幾太郎編 中央公論社 (1970).
- [4] Fromm, Erich: *The Art of Loving*, (1956), Harper & Brothers. =邦訳 『愛するということ』鈴木晶訳 紀伊國屋書店 (1991).
- [5] Habermas, Jürgen: *Erkenntnis und Interesse*, (1968), Frankfurt am Main, = 邦訳 『認識と関心』奥山次良・八木橋貢・渡辺祐邦訳, 未来社, (1981).

- [6] Horkheimer, Max: Die Revolte der Natur, (1947=1967), "*Zur Kritik der instrumentellen Vernunft*", und "*Notizen 1949-1969*" / *Gesammelte Schriften* / *Max Horkheimer Bd. 6*, herausgegeben von Alfred Schmidt, Frankfurt am Main, (1991) = 邦訳 ホルクハイマー, マックス: 理性の腐食, 山口祐弘訳, せりか書房, (1987).
- [7] Horkheimer, Max: Der Mensch in der Wandlung seit der Jahrhundertwende, (1960), *Vorträge und Aufzeichnungen 1949-1973 / Gesammelte Schriften / Max Horkheimer Bd. 8*; Frankfurt am Main, (1985).
- [8] Horkheimer, Max: Kritik des Positivismus [Vorlesungsnachschrift von Alfred Schmidt], (1954), *Nachgelassene Schriften 1949 - 1972 / Max Horkheimer Bd. 13*, herausgegeben von Gunzelin Schmid Noerr, Frankfurt am Main, (1989).
- [9] 市野川容孝(2012)『ヒューマニティーズ 社会学』岩波書店.
- [10] 楠秀樹: ホルクハイマーの社会研究と初期ドイツ社会学, 社会評論社, (2008).
- [18] 楠秀樹: 形而上学への批判—フランクフルト学派とヴィーン学団との交差についてのプロローグ, 総合文化研究 第9号, (2012).
- [19] 楠秀樹: 自然科学の欠如と過大評価—「学際性」におけるフランクフルト学派とヴィーン学団の相違, 総合文化研究 第10号, (2013).
- [20] 清水幾太郎 「コントとスペンサー」(解説): 『世界の名著第36巻 コント スペンサー』清水幾太郎訳 中央公論社 (1970).
- [21] Spencer, Herbert, *Essays on Education and Kindred Subjects*, (1911=1963), London.=邦訳「進歩について—その法則と原因」(『教育論』所収) 世界の名著第36巻 コント スペンサー』清水幾太郎編 中央公論社 (1970).